



# ありふれた出会い

---

---

終 幸

---

彼女との出会いは、何のドラマ性もない至極ありふれたものだった。

席替えで隣の席に座った。ただそれだけの関係。

彼女はふちの太いめがねをかけた、見た目すごくおとなしそうに見える女の子だった。

ぼくらは席が隣というだけで、なんとなく話すことが増え、家の方角が同じだったから一緒に帰ることも多くなった。

ただそれだけの関係。付き合っているとか、告白とか、そんなものとは無縁だった。そんな普通の関係だった・・・

一度だけだったが、一緒にクリスマスをお過ごしたことがあった。クリスマスケーキを持って、いきなり僕の家を訪ねてきた君は、開口一番「勘違いしないでね。」と言った。

「たまたま友達の働いてるケーキ屋さんで余ってたから買ってきただけなんだから」真っ赤になって口をとがらせる君。君の嘘はすぐにばれていたよ。

その時、君がくれたクリスマスプレゼントの腕時計。すでに動かないけど、今でも静かに僕の腕の上にある。

あの時、僕は君が来るなんて思ってもいなくて、ましてやプレゼントなんて用意していなかったんだ。今度必ず渡すって約束したのに。それはかなわぬ願いとなった。

君が転校すると聞いたのは、次の日、学校に行ってからだった。

君の荷物はきれいに消え去り、もともと誰もいなかったかのように、机だけがその場に存在していた。

先生が彼女は今日すぐに旅立つのだという話を終えた瞬間。僕はホームルームの最中でもそんなことにせずに、教室を飛び出していた。

君と帰った並木道を走り、君の家に向かった。息も絶え絶えにたどり着いた君の家に、すでに君の姿はない。

隣の人に今出たばかりだということ、東京駅から出発することをきいた僕はタクシーを飛ばして駅に向かった。

僕の願いは通じた。

駅のホームで君を見つけることができたとき、僕は本気で神に感謝した。

「待って！」

声の限りに、僕は君を呼び止める。

君はひどく驚いていたね。僕は人目も気にせず、今の気持ちを叫んだんだ。

・・・しかし、君からの返事はNOだった。

「勘違いしないで、私たちはたまたま席が隣だっただけ、ただそれだけ、でしょ？」

涙をこらえてうつむく君。君はうそが下手だ。

「会いに行くよ！」

「こないで」

「手紙を書くよ！」

「いらない。返事も書かない」

君は首を振るばかり。

「じゃあ、ずっと待ってる。毎年クリスマスにこの場所で、君を待ってる」

「待ってても、私は来ないよ」

「でも待ってる」

「・・・っ」

君は逃げるように家族の待つ電車に乗り込み、行き先も知らせぬまま、僕の前から去っていった。

僕の中で時間が止まった。

新幹線のぞみ。名前ばかりで僕の望みなんて何一つかねえてはくれない。

今年のクリスマスも一人、ホームで君を待つ僕を、冷たい風があざ笑う。

僕の腕時計はあの時、君と別れたまま、時を刻むことを忘れた。

何度目のことだったろうか。動かない時計を確認したとき僕は目を疑った。

今まで動くことがなかった秒針が、再び時を刻み始めた。

そのとき、背後から声がかかる。

「おじいさん、誰を待っているんです？」

振り返るとそこには、六十年前と変わらない、ふちの太いめがねをかけた君がいた。

「馬鹿ね、本当に待っているなんて・・・。勘違いしないでね、私だって今日はたまたま通りがかっただけなんだから」

真っ赤な顔で照れる君。

やっぱり君は、嘘がへたくそだ。

END